上荒磯　佑哉

「申し訳ございません。そちらの商品は当店全て完売してしまいまして」

俺は、もう何度目か分からない同じフレーズをに発する。基本、神様に絶対服従のの俺たちだがそれでも唯一、意見を発していい時が存在する。それは、神様が求めている商品が無い時である。

　勿論、常にメニューに載っている商品がなくなるということはない。しかし、それは逆に常にメニューに載っていない商品。そう例えば出ればその瞬間、神様のご来店倍増、俺たちの仕事も倍増する魔の権化、期間限定商品はそうではないのだ。

　基本的に期間限定商品というのは約一か月で終了する。だが、それまで期間限定商品の材料が残った試はない。大抵、二週間過ぎたあたりから材量は枯渇し始め、二十五日を過ぎれば絶対にない。

　そうなれば、我々が唯一神様反撃することができる呪文「申し訳ございません。そちらの商品は当店全て完売してしまいまして」が言えるのだ。この呪文を言えば大抵の神様は少し残念そうな顔をするので少し優越感に浸れる。しかし、この呪文も決して万能ではない。まず目の前の神様にしか効果が無く次のお客様にも同じことを言わなくてはいけない。それが、二、三かいならまだ良いがこれが五回、六回と続くと話はべつだ。優越感はなくなり、同じ言葉を発しているため段々頭がバグっていく。

　そう、「申し訳ございません。そちらの商品は当店全て完売してしまいまして」は神様に唯一反撃できる呪文から奴隷の頭を壊す、呪いの呪文へと変わっていく。まぁ、ぶっちゃけ無と言うと素直に違う要求をしてくれるだけまだマシなんだけど。たまに、現実を受け入れられずに駄々をこねるビッグベイビーみたいな神様もいるからなー。そうそうこんな風に

「なんで、なんでないの」

はい、きましたービッグベイビー神様の常套句「なんで」……こっちが言いたいは！　逆になんでまだあると思うんだよ。こんな、次の期間限定商品秒読みのこの時期に。あー、後ろのお客さんめっちゃにらんでるよ。

　俺は、目の前の小太りでまったくかわいげのないビッグベイビー神様の、その残り少ない髪を引っこ抜きたい衝動を必死に抑えながら文面を考える。

「えっと、ソースなどの材料がなくてですね、それで納品もなくてですね。それでお出しすることが出来ないんですよねー」

　俺は、出来るだけ波風が立たないように下手にでながら言う。さーぁどうだ。これで、諦めてもらえる……はず。

「あー、そうなの。じゃーこれでいいや」

なぜ上からなんてことは今更思わない。俺が思うのは一つ。今すぐ、回れ右してママのミルクでも飲んでてくださっと、危ない本音が出るところだった。ふぅー、落ち着け。さっ、次々とっ、この神様は。俺の目の前に来たのは小さなおばあさんだった。この方は、このお店の常連の一人。俺は、この人をチョダイさんと言っている。何故、、チョダイさんと言うのかと言うとこの人の頼み方が

「えっとね、ナゲットとねコーヒーチョダイ」

と、このようにかなり早口で聞き取れない注文をするのだ。しかも、常連さんの為自分が欲しい商品の金額も分かっている。だから、俺が聞き間違えたりしてお会計が違うとすぐ分かってしまう。いやまぁ、間違えた俺も悪いんだけどそれでもこう何回も同じような事をすると頭も混乱するということを分かってほしい。

　まぁ、常連だけに頼む注文さえ分かればこれほど簡単に対応のできる人もいないのだが。

俺は、そんなことを思いつつチラリと俺は時計を見る。そろそろ一時間か……となると

「カワリマス」

と俺の後ろから声がかかる。振り向くと、南米あたりに国籍を持つ女性がいた。別段珍しくもない、俺と同じの一人だ。どうやら、俺の仕事は変わるらしい。さて、次はどんな仕事になるのか、俺はできれば楽な仕事が良いなと思いながら、奴隷たちを仕切ってるマネージャーに支持を仰ぐ。

「次、どこですか」

「えっとージョウちゃんはねー……ドリンクランナー入って」

　俺は、それを聞いた瞬間チラリと後ろを見る。そこには店を出ても並ぶ神様の行列が見える。なるほど、どうやら、マネジャーんは俺に光の速さを手に入れろといっているらしい。うん

「分かりました」

　俺は、出来るだけ笑顔を作りドリンクランナーに入るのだった。

カウンター編完　ドリンカー編に続く